薬師寺発掘調査報告

第Ⅰ章　序　　言

この報告は，奈良市西ノ京町に所在する史跡薬師寺境内において10数年にわたって実施された発掘調査の結果をとりまとめたものである。同寺境内及び旧境内においては，昭和９年から昭和61年に至るまでの間に30個所近くの場所で発掘調査が行われている。とくに昭和43年からは，伽藍の復興・整備を主な目的としてほとんど毎年のように調査が行われている。

現在，薬師寺の景観は10年前とは比較にならないほどの変貌をとげている。金堂，西僧房，東僧房，西塔，中門等の堂塔が次々と復興され，回廊の再建も計画されており，往時の姿を再現しつつある。このような復興計画には，創建時の状況をより適確に把握することがまず第一に必要とされる。そのための重要な手段として発掘調査があげられる。その成果によって極めて高い実証的資料を得ることができる。建物の配置，平面や柱間寸法，基礎・基壇の状況が明らかになるばかりでなく，構造形式や細部を想定することも可能となる。遺跡の保存に十分の配慮を加えて基礎工事を計画する必要もあり，このためにも事前の発掘調査がきわめて重要な手段である。

薬師寺境内で行った一連の発掘調査は，奈良国立文化財研究所がたずさわった寺院の発掘調査のうち最も規模が大きく，かつ長期にわたったもので，また，調査によって新たに得た成果も多大なものであった。講堂北側の調査では東西僧房の位置を確認し，小子房・付属屋と一体となった僧房の構成やその使用状況が詳しく判明したこと，さらにいわゆる十字廊の位置や規模を確認したことは，従来文献資料から推定されていた見解を補足修整するところとなった。また，回廊の内側，外側いずれとも決めかねていた鐘楼と経蔵を北面回廊の外側で検出し，さらにその基壇の状況を確認し，その規模の大きいことを裏付けたことも大きな成果であった。

金堂の調査においては創建当初の礎石が多く残されていたこと，基壇上の凝灰岩製敷石も当初のものであったこと，基壇外装が束石を用いない羽目石のみのものであったことなど，創建時の実状がかなり明確になり，その保存状況も良好であることがわかった。

西塔跡に残る基壇は，後世の攪乱が著しく，外装の部分は地覆石の一部と羽目石の残欠を残すのみであったが，心礎は原位置に存在することが知られた。基壇周囲では雨落溝の外側に玉石敷の犬走りや広場を検出し，これらの遺構の保存状況はきわめて良好であった。西僧房においても，創建時の規模・構造についてかなり詳細に知ることができた。これらの発掘で得た成果はほんの一例にすぎないものであるが，このような成果が古代寺院の研究に及ぼす影響は極めて大きく，復興計画にも裨益するところが多大であった。

伽藍の復興工事は，金堂・西僧房・西塔・東僧房・中門とあいついだが，いずれも発掘調査で検出した地下遺構の遺存状況が良好なため，薬師寺伽藍建設委員会ではその保存のため，特

に基礎工事の計画を慎重に検討して実施された。金堂では礎石が創建当初のものであるため，これを動かすことのないよう，基礎杭を礎石と礎石の中間に打ち，工事中に礎石などを損傷させることのないよう，基壇上面に山砂を約30cm盛り，その上にさらに養生を行った。薬師寺境内及びこの周辺では，奈良時代から現在までに約60cm程地盤が上り，さらに周辺の開発によって，今後もこの傾向が続くと考えられる。それを見越して，再建金堂では遺構より80cm上げており，旧基壇上面より上に基礎梁を架け渡した。

西塔の復興についても同様に地下遺構の保存がはかられた。心礎は原位置にあり，基壇の大部分は良好に遺存していたため，直径1.1mのRC杭を基壇の四隅近くに打ち，杭の頂部を井桁梁でつないで基礎を築いた。この基礎で，総重量約600トンの西塔を支えることとしたのである。心礎の上面に心柱を直接に据えず，長さ約1.5mの花崗岩製の柱を心礎に載せ，その上に心柱が立てられた。基壇の高さは，金堂と同様，遺構より約80cm高められたため，良好な状況で遺存していた基壇及びその周囲の遺構の保存が可能となった。

さて，さきにもふれたように，薬師寺伽藍の復興計画は昭和43年から実施に移されることになった。これにともなう事前の発掘調査の初期の段階では薬師寺と近畿大学が中心となり，奈良国立文化財研究所が協力して「薬師寺伽藍発掘調査委員会」と「同発掘調査団」を結成して行われることになった。その後，昭和46年度後半からの調査は奈良国立文化財研究所の手に移されることになり，調査組織もその時の状況によって次のような変遷があった。

昭和29年からの発掘調査組織及び関係者は次のとおりである。(所属はいずれも調査当時)

昭和29年度

大岡　実，村田治郎，浅野　清，杉山信三，鈴木嘉吉，田中一郎，沢村　仁

昭和39年度　奈良国立文化財研究所

杉山信三，松下正司，栗原和彦

昭和43年度～46年度（第1次～第5次）

薬師寺伽藍発掘調査協議会

高田好胤，橋本凝胤（薬師寺），世耕政隆，山口定亮（近畿大学）

薬師寺伽藍発掘調査委員会

浅野　清（大阪工業大学），大岡　実（日本大学），小林　剛（奈良国立文化財研究所），寺坂八郎（近畿大学），福山敏男（平安博物館）以上顧問。太田博太郎（東京大学），岸　俊男（京都大学），町田甲一（東京教育大学）以上常任顧問。

薬師寺伽藍発掘調査団

坪井清足，沢村　仁，田中　琢，阿部義平（奈良国立文化財研究所），杉山信三，林野全孝，桜井敏雄（近畿大学），山田法胤（薬師寺）

昭和46年度～60年度　奈良国立文化財研究所

主として平城宮跡発掘調査部が調査を担当したが，多年の間に調査部長はじめ，職員の移動があり，調査関係者は多数にのぼった。

昭和46年度　金堂，　狩野　久　松下正司　村上訒一　黒崎　直　菅原正明　小笠原好彦　東野治之

昭和49年度　鐘楼・食堂・西僧房ほか，　岡田英男　工楽善通　黒崎　直　今泉隆雄

高瀬要一　山崎信二　千田剛道

昭和50年度　食堂北方，　宮沢智士　黒崎　直　今泉隆雄　高瀬要一　光谷拓実　土肥　孝

六条大路南側溝，　森　郁夫　稲田孝司　中村雅治

昭和51年度　西塔，　狩野　久　田中哲雄　佐藤興治　岡本東三　清水真一

昭和52年度　東僧房北方，　宮本長二郎　森　郁夫　綾村　宏　安田龍太郎　本中　真

十字廊，　加藤　優　菅原正明　毛利光俊彦　亀井伸雄

昭和54年度　東僧房，　宮本長二郎　毛利光俊彦　田辺征夫

西面大垣，　山本忠尚　巽　淳一郎

昭和55年度　西面大垣，　加藤允彦　上原真人　山岸常人

昭和56年度　南門，　立木　修　内田昭人　清田善樹

昭和57年度　中門，　工楽善通　上野邦一　千田剛道　本中　真　杉山　洋

昭和58年度　本坊北方，　工楽善通　千田剛道　本中　真　寺崎保広　田中哲雄

山本忠尚　西　弘海　松村恵司　佐藤　信　山岸常人

昭和60年度　回廊，　工楽善通　上野邦一　千田剛道　巽　淳一郎　本中　真　杉山　洋

報告書刊行は金堂地域の調査終了時にも計画されたが，その後も西僧房，西塔，東僧房，中門等，伽藍中心部における発掘調査が相次いだため，それぞれの地域における調査成果を報告書にもり込む必要もあって，今にいたった。

本報告書の作成にあたっては，上記関係者に加えて奈良国立文化財研究所の多数の研究員が参加し，調査研究の進行にともなって度重なる討議を経て原稿を作成した。なお，薬師寺の歴史については武蔵学園長太田博太郎に執筆を依頼し，塑像については慶応大学教授西川新次氏，脱乾漆像については奈良国立博物館松浦正昭氏，金銅仏像については奈良国立博物館阪田宗彦氏にそれぞれ調査・執筆を依頼した。塑像挿図の作図は辻本干也氏による。薬師寺発掘調査の遺構図は，国土座標（X＝－148094.401，Y＝－19505.169）を原点（0，0）とし，国土方眼方位に対して，西へ0°34′00″振れる薬師寺方位によっている。

執筆分担は次のとおりである。

第Ⅰ章岡田英男，第Ⅱ章太田博太郎・岡田英男，第Ⅲ章森　郁夫，第Ⅳ章1上野邦一，2-A本中　真，2-B・C清水真一，2-D～G亀井伸雄，2-H・I上野邦一，2-J森　郁夫，3肥塚隆保，第Ⅴ章1綾村　宏，2山崎信二，3吉田恵二，4・5・6黒崎　直，7-A西川新次，7-B阪田宗彦，7-C松浦正昭，第Ⅵ章1岡田英男・上野邦一，2森　郁夫・吉田恵二・巽　淳一郎・山崎信二，第Ⅶ章岡田英男・上野邦一，である。付章は大岡　実他『薬師寺南大門及び中門の発掘』（日本建築学会論文報告集 NO. 50 昭和30）の再録である。

英文目次・要約はウイリアム・カーター氏をわずらわした。写真撮影は主として佃　幹雄・八幡扶桑が担当し，池田千賀枝・松田佐由理が助力した。本文編 Fig. 3 の写真は薗部　澄氏の提供であり，図版編カラー写真4・5は株式会社飛鳥園の提供である。編集は，坪井清足・鈴木嘉吉・狩野　久・岡田英男・町田　章の指導のもとに森　郁夫・上野邦一がすすめ完成した。編集作業には石川千恵子の助力を得た。

表紙題字は薬師寺高田好胤管主による。西塔平面図は池田建設株式会社の提供である。